ボトルペット

アカツキノショウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ボトルペット

【Ｎコード】
Ｎ１１３４Ｚ

【作者名】
アカツキノショウ

【あらすじ】
テレビの生放送。ボトルペットというペットボトルで飼う生物という画期的な製品を番組をぶち壊してまで発表した発明家兼科学者の男。その番組に居た著名人達。雑誌のライター、不良の更正のベテラン、ベストセラーの小説家。まったく違う人生を送ってきた四人がこれを機に、お互い意図せずにお互いの人生が繋がっていく。

■重複投稿あり■

×××

――――西暦にして２０２５年。
進む高齢化社会と、少子化に喘ぐ日本。
若者は予測不能で希望皆無の未来にやる気を削がれていた。

「日本の少子化が進むのは、メリットとデメリットの差なわけだよ」
お昼の番組でそこそこな著名人が、少子化問題で
世界の全てを人々の心を理解したかのように語り始める

「自分の世話も見れないのに子供なんて産もうって思うかい。
これは若者が草食系だとか肉食系の問題じゃないんだよ。
昔と違って未来に希望を見たことがない世代なだけでね、
若者がどうとか、そういう問題ではないんだよね」

人を嘲るような、人を見下すような、とても傲慢な口調の男は見ている誰もが
的を射ていても反論したくなるような雰囲気をかもちだしていた。
何より鼻の下についた立派すぎる髭が喋るたびに上下動くのが、どんなものより鼻につく。

「そこでね、私の素晴らしい発明品の話しなんだけど」

番組会場がサァーッと波に浚われたかのようにしずかになる、
他の著名人がぎょっとした目で彼を見る。
カメラマンの動揺からか、カメラ少し揺れる。
ニュースキャスターの顔が固まる。
そして視聴者は理解する。

【これは、予定になかったことが起こったのではないか】と。
視聴者の心が波打った。

「は、発明品ですか？」ニュースキャスターが困った問題児になり得る男を見た。
「ああ、そうだ。　私をご存知ない方も多いかと思う。
私は遺伝子化学の最先端をゆくといわれている科学者だ。
それでいて、発明家でもある」

科学者兼発明家の自己紹介に、同番組に出演していた著名人達が口を開く。
「私は小説家です。昨年【うまい棒の穴は何故空いているか】でベストセラーをとりました」
「私はいじめにより不登校になった少年少女を何百人も救ったベテランの教育者です」
「ぼ、ぼくは【タイラノ】という雑誌でライターをしています」
自己紹介を終えた小説家、教育者、ライターそして科学者達はお互いにお辞儀をして、握手をしあった。

「では、小説家に教育者にタイラノさん。
私の世界初の発明品をとくとご覧になってほしい。
このテレビ番組で私の発明を披露するのはとても、残念だし、とても場違いだ」
その場にいたスタッフ全員が口をあけたまま、
大袈裟ともいえる科学者の身振り手振りを見ているしかなかった。

「それでも、此処で発表するしかないのだ。
どこかの国で何かの賞をもらったところで日本人の耳から目からたれ流れるだけだ。

私は見てほしいのだ。目を開け、刮目せよ。
これさえあれば、国が救える！」

彼が取り出したのは一本のペットボトルだった。
会場が凍りついた。
しかし、それは期待を裏切ったからではない。
ペットボトルの中に入っていたイキモノに対してである。

「な、何だ。それは」
静まりかえったスタジオで一番に口を開けたのはライターの男だった。
科学者の持つペットボトルにはかつて少女達が遊んだであろうリカちゃん人形大のものが入っていた。

しかし、リカちゃん人形ではない。
ペットボトルから除くそのイキモノの瞳は、ものめずらしげに周りをみまわし。
きょとんとした顔で首をかしげた。

「人間だ……」

ニュースキャスターが呟いた声と共に、その番組がぷっつりと切れた。
お茶の間に真っ黒な画面が２０分間流れ続けた。

――

科学者の思惑通りに日本中が大騒ぎになった。

全てのニュースであの番組のシーンが何度も、何度も、何度も再生された。

【私は見てほしいのだ。目を開け、刮目せよ。
これさえあれば、国が救える！】

【私は見てほしいのだ。目を開け、刮目せよ。
これさえあれば、国が救える！】

【私は見てほしいのだ。目を開け、刮目せよ。
これさえあれば、国が救える！】

【私は見てほしいのだ。目を開け、刮目せよ。
これさえあれば、国が救える！】

しかし、大半がロボット説を唱え、残りはＣＧ説を唱えるという始末。

「なんて夢がない連中なんだ。まあいい、大量生産の準備は出来ている。
皆でこの子達を育てようじゃないか……」

科学者の男はネットの論争を見守りつつ、たった一人、真っ暗な部屋でほくそ笑んだ。

問題の番組が放送されてから一ヶ月。
ボトルペットという商品名でペットボトルが店という店で平積みにされてから１５日。

その１５日で確かに、日本が……否、世界が変わっていた。
ペットボトルの中には透明の水と見違うような液体が
まるで普通に入っていた。
しかし普通のペットボトルとは違うのは液体の中にゴルフボールく
らいの大きさの白い玉が入っていることである。

そしてペットボトルの側面には
普通の飲み物ならば書いていないことが堂々とまるで普通に、記さ
れている。

「ボトルペットは生き物ですが、一切の特性を持ちません。
感情もなければ思考もない状態です。
一から作り出された唯一の生き物ですので、
遺伝や血筋などと言ったものとは無縁の
貴方が一から作れる人間でもあります。

この子をどんな子に育てるかは貴方次第です。
当者は一切の責任をもちません。
一生の無責任で居続けます」

タイラノライター

■　タイラノライター

雑誌【タイラノ】のライターである平野ユキは
ボトルペットを手にしたまま呆然と立ちすくんでいた。
タイラノの発行部数はあの番組のおかげで４倍近くに跳ね上がり、
平野の懐には、生まれてはじめてといってもいい春風がまいこんで
きている。

ボトルペットは一つ５０万という高値だった。
（一人の生き物を買うにしては妥当かもしれなかったが）
通常の平野では到底買えない買い物である。
しかし、今は通常の平野ではない。
タイラノの跳ね上がった部数で平野の給与も跳ね上がっている。
買うなら今しかない。
平野ユキはボトルペットを手にしてレジへと向かおうとした時だっ
た。

平野ユキは倒れた。
ユキは状況を理解し、立ち上がるまで五分以上かかった。
それだけ目の前の現状はイキナリだったのだ。

平野を倒したのは髪をパッションピンクに染めた青年だった。
それだけでも、【何なんだ一体！】という事態だというのに
その青年はナイフを片手に持っていたし、

何より懐にペットボトル……
否、ボトルペットを抱え込んでいたのだ。

「妹がほしいんだよお。ほしいんだよお、ほしいんだよお」
そう言って倒したユキのことには目もくれずに
彼は一目散に逃げていく。
そしてそんな彼を追うのは、ここの警備員と店員と思われる人間達だ。

「万引きか、」
ユキは現状を理解したものの心臓はどきどきしたままだった。
今時は監視カメラもセキュリティもしっかりしていて、犯罪するだけ損の時代だ。
ユキは落としてしまったボトルペットを拾い上げ、
深呼吸をした後レジへ歩を進めた。

ユキがカードで５０万の買い物をした後、大幅な後悔が襲ってきたのは言うまでもない。

【この子をどんな子に育てるかは貴方次第です。
当者は一切の責任をもちません。
一生の無責任で居続けます】
という注意文の意味をユキはてっきりどんな子供に育とうが責任を持たないというつながりで理解していた。
本当の意味はボトルペットを買った途端に店員から手渡される京極夏彦の小説と並べても
遜色ない説明書がついていることを知っても返品を許さん。という、無責任さなのだ。

一度買うとキャンセルが出来ない方針であること、
一切の返品を受け付けないということ、
何故返品が受け付けられないのか。ということが説明書の一ページ目につらつらとかかれていた。

それはボトルペットが企業ではなく、個人で生産されているから。
そしてその個人が一度買うと決めたら文句言うな。という信念の持ち主だから。という、
誰もが納得できない理由だった。
一体何人が返品を願っただろうか、とユキは思うものの不思議と怒りは沸きあがらなかった。
それよりも今、片手に存在しているボトルペットという未知の存在に少年の如くわくわくしていた。

そのわくわくに大人らしい怒りは勝てなかった。
少年の時に感じた理不尽に対する怒り、
大人の頭ごなしの常識、今まで培ってきた全ての経験と思考が破壊されるに充分な代物だった。

手にしている一見ふつうのペットボトルは
何の技術なのか。
人肌に温かく、粉雪がちらちらと目の前を舞っていく
この季節には涙があふれ出るほどに優しさを感じた。

平野ユキの家は駅から徒歩五分という便利な場所にある。
マンションは築15年。かつての真っ白な壁は灰色に染まりつつあった。
このマンションの良いところは内装に全く凝っておらず、

夫婦や家族といった人間には住み辛く、
独り者である平野のような人間に優しい状況だ。

ブラウン色のドアを開け、平野は迎えるものが居ない家へと帰ってきた。
ダイニングと寝室はわかれておらず、大きな部屋がたった一つ。
それがこのマンションの内装なのだ。
そして平野の部屋と言えば生活感のないキッチンと、
一人にしては広すぎる机と、一つだけの椅子。
誰かがこの部屋に入ったとしたら、
【孤独】が漂うことに気付かないものはいないだろう。

しかし平野の家に誰かが来るということはまず、ない。
自慢できることではなかったが平野に友人は一人もいなかった。
平野は慣れた手つきでドアの鍵を閉め、
ボトルペットと説明書のせいでぱんぱんに膨れ上がっている仕事鞄を机に置いた。
「今日は惣菜が安かったからなー」
誰が聞いてるわけでもなかったが平野は喋った。

仕事鞄の中からカボチャの煮物と、ポテトサラダの入ったパックを取り出した。
説明書のせいでパックの形が歪んでいた。
いつもならばテレビでもつけて、芸能人が面白可笑しくバカを演じる姿を見るところだったが、
この、ハリーポッターを五冊並べて置いたような説明書を読むことが先決だ。

平野はカボチャの煮物とポテトサラダを皿にうつし、

冷蔵庫からビールを取り出す。
「よし、」と気合を入れると平野は説明書の扉を開いた。

■　1　　ボトルペットを孵化させるためには　　■

ボトルペットの中に入っている白い玉は卵だと考えてくださってかまいません。
だからといって、取り出して割って食べることはオススメしません。
食べても当者は一切の責任を負いません。
卵の間はとてもデリケートな時期です。
毎日日当たりの良い場所においてあげてください。
暗闇において置くと【盲目】となります。

そして、極度の極寒で育てますと、（例えば冷凍庫の中）
全身毛だらけの雪男と称されてもおかしくない生物となってしまいます。
あまりオススメしません。

ただ毎日日当たりの良い場所へ置き、
時々声をかけたり、本を読んであげたり、音楽を聞かせてあげてください。
本を読めば文学少女に文学少年になる確率は高いです。
貴方が好きな小説や貴方が嫌いな小説、貴方と趣味を語り合う相手となってくれるでしょう。

音楽を聞かせれば、クラシックだと高貴な乙女に、ロックだったらジャンキーに。

制限はありません。
あなたの趣味にあったことを卵達に語りかけてあげてください。
上手く行けば１０日ほどで孵化します。

平野はわくわくと同時に少し恐ろしくなってきた。
一つの間違いが簡単にこの生き物の一生を決めてしまう可能性があるのだ。
盲目になってしまうかもしれないし、雪男、はてはジャンキーだ。
平野はボトルペットを目の前にして両手をすりあわせ、息を静かに吐いた
「慎重にことを進めないとな、」

平野がボトルペットを育てることを実感しはじめた時、
平野を数時間前に転ばせた相手は大変な間違いを犯している最中だった。

パッションピンクに髪を染めた男はビルとビルの隙間にはさまれていた。
「おい、もう諦めろや兄ちゃん」
警備員の男が呆れ半分にパッションピンクに語りかける。
彼はビルとビルの間に挟まれ身動きがとれず、
とれたところで奥に行けば警察官が呆れ顔で立っている。
八方塞とはこのことだった。

「何が日本を救えるだあ？
５０万もの買い物をぱっとできる奴はどこかしらで幸せなんだよ！
俺は金もねえ、女もいねえ、酒も弱え、何も楽しみがねえんだよ」

不満を意気揚々と語り、盗んだときは五つも持っていたボトルペットも
逃げに逃げまわった今では、落としに落として
右手に握る一本となってしまっていた。

「日本を救いたいならなあ、
俺達みたいなクズをどうにかしろって製作者に伝えとけ」

パッションピンクの叫びと思いに対して、警察官が
「君のことは君の製作者に伝えることになる」と眉を顰めて言った。

「母さんにも父さんにもご勝手にぃい。
でも俺は、つ、かまらねえ……」
パッションピンクの男は
ボトルペットを口にくわえて、かろうじで動く手を上に向けた。
警察官と警備員の男がぎょっとする。

それは人間業には到底見えなかった。
指の力のみで彼は上に這い上がろうとしたのだ。ビルの壁に血が滲んだ。
その光景は信じられないものだったが、ぎちぎちという音と共に
がりがりと背中や太腿が向かいのビルにひっかかる音と共に
彼の足は地面から２０センチは浮いた。

爪に血が滲み、指から吹き出た血が腕にたれ、
ボトルペットが入ったペットボトルまで赤くそまる。
「やめなさい！君ぃ！」
警察官が驚きのあまり、止めようと彼の方へ駆け寄ろうとした。
そして警察官は気付く。

やってしまった！

ビルとビルの間に自分のおなかがつかえ、
とてもじゃないがパッションピンク男に近づくことはかなわなかった。

警察官の惨事を目にした警備員は、何と声をかけて良いか分からずに口をぱくぱくと閉じたり開けたりという動作を繰り出すしかない。

「昨日のカツ丼が祟ったか……」
警察官が昨日の夕食に後悔をめぐらせている間も、
パッションピンクの彼は自身の爪を犠牲にしながら上へとのぼっていく。
高さにして約2メートル、彼は下を一度も見ることもなく、
ただ自分の欲望に真っ正直に上を目指した。
二階の窓枠に彼の手がかかった。

「警察官さん、俺はどうしたらいいんだろう？」
警備員がやっと口を開いた。
目の前のピンク髪男の狂行に警備員の脳内は未だに追いついていなかったが
現状理解をするより、現行逮捕をしなければ。という思いが勝ったのだろう。

「どうしろも何も、俺は身動きがとれない。
俺が太ってるからじゃないぞ、ビルとビルの間が狭すぎる！
これは絶対に法的に問題があるに違いない。
あのピンク髪を逮捕したら此処についても調べが入るように手配してやる。

くそ、俺が太ってるからじゃない」
警察官が自分のおなかまわりの擁護をはじめた。
「お前が太ってないのは理解した。
だけど、彼を逮捕出来ない可能性が多いにある！
お前は確かにつまってしまったけれど、顔を上に向けるくらいは出来るだろう？
見てくれよ、あの野朗は今……」
警備員が指を指す、警察官が上を見る。
パッションピンク男が二階の窓を開けた、【カラカラ】という音がした。
警備員と警察官が顔を見合わせた。

「今すぐ二階へ向うんだ、俺のことはいいから先に行け！此処は俺に任せろ！」
警察官の自己犠牲ならぬ、自業自得に警備員は気付かずに
「分かった、此処はお前に任せる……」と、言い残した。

警備員は男を捕まえるため、
捨て身で挑んだ警察官の期待に応えるために
ビルへと飛び込んだ。

彼がビルの中へと入った同時に、救助隊のサイレンが聞こえた。
警察官の男は自分が助かることを確信した。
しかし、到着した救助隊に警察官はこう言ったのだった。

「二階に万引き犯が居る。特徴は髪の毛がピンクだということだ。
俺の救助は、あいつを捕まえてからでいいんだ」

救助隊は万引き犯の逃げ場をなくすためにビルのまわりを囲むように配置された。
そのビルの中で何が起ころうとしているかも知らずに、警察官は勝ち誇った表情を浮かべた

――

二階の窓から突如現れたピンクに髪を染めた男は、
目を丸くするビルに勤めている社員たちには目もくれなかった。

「指先の感覚がねえや」と、男は笑いながら口にした。

社員達は触らぬ神に祟りなし。という言葉を思い出し、各々のやるべき仕事を進めることにした。
男は痛いという感覚すらマヒした指を見つめる爪ははがれ、ひどいところはめりこんでいた。
それでも、ボトルペットを手に出来た悦びの方が大きく、男は笑みを浮かべた。
男はここからどうやって、出るか。という方法については得策があったのだった。

――

救助隊がビルの周りを占拠し、警察の応援を待つ間。
万引き犯をここまで逃がしてしまった警備員の男は二階を探し回っていた。
あのピンク髪の万引き犯は見当たらず警備員の苛立ちはつのった。

「どこ行きやがったんだ。あのピンク野朗」
警備員の男はあと一歩で犯罪者が捕まえられない、というもどかしさに耐えかねて壁を殴った。
そんな警備員に見かねた女性社員が疑問を投げかけた。
「万引き犯一人に大袈裟じゃありませんか、何千万盗んだか知りませんけど」
女性社員は窓の外から、ビルを囲むように存在している救助隊に視線を向ける。
警備員はため息交じりに答えはじめた

「実は、その万引き犯が盗んだのはボトルペットでしてね」
「ああ、今話題の」　社員がひどくどうでも良さそうに相槌をうった。
「それにしても、あれって５０万程度でしょ？」
女性社員は呆れ半分にそう続ける。
警備員は心苦しげな表情を浮かべ、事実を伝える。

「ボトルペットには数々の制約があるんです」
警備員の脳内ではボトルペットを購入した人達が抱える説明書が浮かんでいた。

「彼はそれを知らずにボトルペットを盗んだときた……、」
警備員の目には同情の色が浮かぶ

「私達は彼を捕まえると同時に守りたいんです。
ボトルペットにはどうも、不思議な力がある。
まるでわが子をこの手に抱いたような感動がある。
だから、彼がほしがってしまったのも理解できないわけではない。
だからこそ、破ってしまったらきっと悲しい。

ボトルペットは制約を破ったら生きていけない、
実はとても悲しい生き物なんですよ……」

ボトルペットが繊細であり、とても悲しい生き物であると知りもしない男は
現在、二階の男子トイレの中に居た。
だが、警備員や警察官が認識していた【髪をピンクに染めた男】ではなくなっていた。
この世に存在する誰もがこの様子を見たら【子供だましめ】と一笑されるかもしれないが、
この男は本気だった。

男はピンクの髪を外した。それも意図も簡単に。
そのピンクの髪の下から出てきたのは、黒髪の短髪だった。
この男の計画を簡単に話そう。

ことの発端は英国で昔、1億円が盗まれるという強盗事件があったことに由来する。
その強盗団達は手口はいたって普通だったものの、
ほかの強盗団とは違い髪が赤や青、果ては緑に紫と、
並んだら綺麗な虹色を思わせる奇抜なものだったらしい。

被害にあった人はまず【髪の色】を警察官達に報告した。
しかし、その奇抜な髪の色をした人間は近くに存在しなかった。
その髪は生まれつきのものでもなければ、染めたわけでもない。
単にカツラだったという、真相が分かれば馬鹿らしいことこの上ないが
被害者達の脳内に残ったのは【奇抜な髪の色をしていた】　という

イメージだけだった。
その男達はまんまと逃げ出したわけだ。

その計画と同じことをしてやろう、と男は考え
ピンクのカツラを外すと、次は服にとりかかった。
男が着ていた上着は先ほどまで目が痛くなるようなオレンジだったが、
裏に返せば地味を具現化したような緑色になるリバーシブルだった。
そしてリバーシブルジャケットのオレンジについているポケットにボトルペットを入れ、
男は逃亡への第一歩を踏み出すのだった。

しかし、彼の逃亡計画は意図も簡単に失敗に終わることになった。
彼が外に出ると同時に、「確保！」という号令がかかった。
号令発した人間が警察官の制服を着ていなかったことと、確保の段取りがおぼつかないことで
警察機関の人間ではないと判断し、彼はまたビルの中へと逃げ込んだが
数人の男に追いかけられ、顔も見られ、何故自分だとバレたのかも分からず、
二階と一階を行き来する階段で転び、大の男達に取り押さえられそうになり、
無我夢中で抵抗をし、頬骨を強打し痛みで涙をぼろぼろとこぼし、
そして自分が欲しくて欲しくてたまらなかったボトルペットが裏ポケットで壊れ、
中の液体が自分の体に付着したのを感じた。

そして、何人もの男に上に乗られた時、男の目の前に壊れたボトル
ペットから飛び出してしまったであろう、
白い卵のようなものがまるで彼の運命かのように転がってきた。
男は考える暇もなく、両手が拘束されたのも感じたが自分の背筋と
腹筋の力をふりしぼって
卵に口を触れた。
そして、取り押さえた人間が彼の狂行に気付くこともなく
卵は男の異の中へと流し込まれていった。

卵と一体化する安堵に包まれながら男は自分を捕縛した相手に問う
「どうして俺が俺だと分かったんだよ」

「どうしてって、私服の人間はお前しかいないからだよ」
と、自分を追いかけに追いかけたであろう警備員が応えた。

ベテランの秘密

ベテラン教育者　加賀あい子　は、
数々の不登校者や引きこもりといった問題児を外に出してきた。

「加賀あい子さん、不登校や引きこもりといった子を持つ親になんと伝えていきたいですか」

加賀あい子は現在、【タイラノ】という雑誌のインタビューを受けている最中だった。
あい子は胸元に光る銀色のペンダントを撫で回すように触りながら

「子供が学校に行かなくても良い。ということを知るべきです。
学校に行かなくてもいくらだって生きていく方向があるということを親が知れば、子を許せるようになり、そして子供も自分の存在を許せるようになる。
お互いを許しあえば必ず、生きていく道は見えるのです」

記者は何度か頷きながらメモをとったフリをしたが
あい子にはこの記者に対しての【不信感】が募りに募っていた。
まず、あい子と記者が居る場所が問題だった。
あい子と記者が座る席の横では
赤ん坊がミルクか、オムツ換えを望み泣き喚いていたし、
レジの前に設置されているオモチャが並んでいる棚では
五歳児か六歳児の男の子が商品で戦争をはじめていた。

「ぴゅーん、１０１号がきえたぞレッドはどこいったんだ」
「１０１号　どっかいったままもどってきません　たいちょうどうしましょう」

男の子の空想の中ではミニカーが空を飛び、レッドという人間が戻ってこないという緊急事態だ。

「あいつはコンビニにいる！」
「たいちょう　私のえんじんがこしょうしました　わたしはわたしは……」

「加賀さん、では次は子供達へ一言お願いできますか？」
あい子ははっと我に返り、記者の質問に答えようと背筋をピンと、のばしたが
「女死亡」戦争ごっこをしている男の子が女性隊員の死亡を確認。

隣では赤ん坊が泣き喚いている、
後ろの席に座っている男は競馬の中継を携帯で確認中。
がやがやがや、という効果音がぴったりだ、
「加賀さん？聞いてます？あの、加賀さん」
「さよなら女、レッドは俺が見つける」
「俺の全財産をかけてんだ、頑張ってくれよ」
「加賀さーん？」
「おなかすいちゃったのかにゃー？」
「おい、頼むぞ俺の全財産が……」
「女は死んだ！」

ああ、ああ……

「ファミレスでインタビューなんて聞いたことがないわ！」
私の怒りはがやがやの音に上手くかき消され、記者が驚いた顔で私を凝視していた
「大体、貴方ねえ……この録音機さっきから電源入ってないわよ」
あい子は記者と自分の間に置かれた録音機を叩いた。

「おっと、僕としたことが」
記者は自分の頭をこつんと叩いたが可愛くも何ともない。
「録音機も電源が入ってないし、メモだって大してとってない。
しかも、場所がファミレス？　本当にインタビューする気あるの？」
加賀が言いたいことを全て記者にぶちまけた時、

――記者は笑った。

「ええ、ありますよ。　貴方の息子の加賀ヒロヤ君のことでね」
あい子の表情が固まった。
そしてあい子の先ほどの怒りは見る間もなく、しぼんでいく

「私の息子が何か？」
彼女はしぼみそうな自尊心を見せまいとして
精一杯の自信と嘘をかきあつめて、記者に問う。

「加賀ヒロヤ君……万引きで捕まったそうですね、いや……強盗かな？」
記者がメモ帳をぱたん、と閉じた。
あい子はインタビューが終わったことを感じた。

「それが嘘か本当かは分かりかねますけど、どこの情報ですか？」
あい子は記者に【負け】を認めたくないあまりに、精一杯の笑顔ま

で見繕ってみせる。
「実は私、その現場に居たんですよ」
記者――……平野ユキは心からの笑顔を。

――

ベテランの教育者、加賀あい子を語るにあたって息子であるヒロヤを無視することはできない。
あい子にとって人生唯一の汚点であり、その汚点の染みはどんどんとほかの布にしみこみ
今ではあい子自身さえも飲み込んでしまっていた。

「現場に……？話しによるとうちの子は変装していたと聞きますけど」
あい子は引っかかるものか。と、ばかりに記者の答えに食ってかかった。
「ええ、実は私個人の恨みつらみが彼にありまして」
記者は淡々とした口調で続ける

「恨みつらみ？」
あい子は記者の淡々とした口調に何故か言い表しようのない狂気を感じた
記者の目は薄暗く、孤独の寂しさを感じさせる。
なのに何故か安穏とした雰囲気を持っていて、……言うならば人間の境地を見たような目だ。

あい子は教育者としてたくさんの人間を見てきた。
問題のある子供から、問題のある大人、目の前に居る男はあまりに異質だった。

「ええ、ボトルペットをご存知ですか？」

記者の男は微笑んだ。
あい子は異質な男の、異質な記憶と経験を聞かされることになる。

———三ヶ月前の夕方、加賀ヒロヤがボトルペットを盗み、記者の男がボトルペットを買った日。
彼は説明書を読み、加賀ヒロヤが捕まった日。
それがはじまりの日であった。

いや、もっと前かもしれない。
加賀さんは覚えていないかもしれないが、私達は今日ファミレスではじめて会ったわけじゃない。
三ヶ月前の番組で、ボトルペットが公開されたその日に貴方と私は運命かのようにそこに居たんですよ。

加賀は思い返してはっとする、
「私は小説家です。昨年【うまい棒の穴は何故空いているか】でベストセラーをとりました」
「私はいじめにより不登校になった少年少女を何百人も救ったベテランの教育者です」
「ぼ、ぼくは【タイラノ】という雑誌でライターをしています」

もしかして、あの時の……、
ボトルペットの制約をご存知ですか。
彼は加賀に問いかける。
「知りません」加賀の答えに男は満足したように話しはじめる。

■■ボトルペットと過ごす二日目。

平野ユキはいつものように、
目覚ましにセットした携帯の無機質な音で起きた。
昨日、寝る直前まで読んでいた説明書のせいか頭が重い気がした。
この歳になると一気に知識を入れるというのも億劫だ。

まだおぼつかない足でシャワールームへ向かう。
頭をすっきりさせるためには何がなんでも【風呂】というのがユキの日課だった。
パジャマを脱いだところで、ボトルペットの存在を思い出し、寝室に戻る。

確か、一緒に風呂に入ることも大事だった気がする。
【清潔感のあるペットがお好みならば、毎日１０分ほど湯船につける（卵の場合は５分程度）】
ユキの頭の中で説明書の文面が浮かび上がった
ボトルペットを手に持ち、白いボール……否、卵を見る。

昨日より少しだが大きくなっている気がした。
部屋に帰れば何かに煩わされることのなかった生活が、少し変わった。

ユキは風呂場にボトルペットを持ち込み、
洗面器に湯をためて、ペットボトルを慎重に湯につかした。
ペットボトルが案外気持ちよさそうに湯に浮いているのを見届けた後、
―敏感肌用―という、シャンプーを手にとりユキは自分の頭を洗うことにした。

自分の親父が大雑把に洗っていたのを、ユキは今でも思い出すのだ。
そのせいで親父は４０代後半には波平と良い勝負の頭をしていた。
俺はそうはならないぞ、と中三の夏にユキは決心してから自分の髪を大切に扱っている。
おかげで額の広がりは一切見えない。

シャンプーを丹念に洗い流していると、「きゅー」という小猫でも鳴いてるかのような音がした。
一瞬、猫でも迷いこんでいたのかと心臓が波打ったが、
何のことはない。

洗面器の中に入っているペットボトルからだった。
頭を洗っていた手が止まり、ペットボトルに目をやると卵が赤く染まりかけていた
自分の髪の毛に気を遣いすぎていて、すっかり存在を忘れていた。

ボトルペットを手にとり、大慌てでタオルにつつむ。
そして自分の体もふかずに寝室に戻り説明書をひらき、
嫌なほどならんでいる目次を目で追う

【ペットがのぼせた場合の対処法】２０６Ｐ～２０７Ｐ
俺の５０万がドブの中に入りかけているんじゃ？という不安で、
自分の体についている水滴が冷えていくのも気にせずにページをめくっていく。

――卵の場合はゆでたまごになる瀬戸際です。あせってください
と、一行目にかいてあった。
焦っている、俺は充分焦っているよ。ユキは次の行に目をはしらせる。

――氷水につけて表面が雪のように真っ白になるまで冷やしてあげてください。
ユキは自分の体が氷水につけられたかのように冷えていることに気付いていたが
５０万と自分の体、どっちをとるかは目に見えていた。
冷凍庫から氷を素手で数個持ち、風呂場へ向かう。

先ほどまで湯が入っていた洗面器に入れ、水を入れる。
手は急激な温度の差で上手く動かない。
しかし、ゆっくりとボトルペットを傷つけないように氷水の中に入れユキはふー……と一息ついた。

ユキが裸で走り回っているのを、向かいのおばさんが窓から見ていた。
「あーんた、聞いてよ。あっちのお向かいの人いんだろ？
窓かっぴろげて裸で走りまわってんだよ
だから言ったろ？向かいの平野さんはちょっと頭がおかしい目えしてるって」

「まだ若いんだろう。俺も若い頃は窓かっぴろげて裸で準備体操したもんだ」

「あーんたのせいで私がどんだけ恥しい思いしたか。
その準備体操外でやるからアンタが捕まっちまって。
アンタの夫、おなかに子供いらっしゃるんですか。って隣の井上さんに言われた時は
アンタが男だって証明するために、まーたアンタが捕まっちまって
……」

ご近所の噂話になっているとも知らずにユキは
洗面器の中のペットボトルが【きゅー】と音をたてながら色が白くなっていくのを見つめていた。

卵の表面が白くなると、ユキは氷水からペットボトルを取り出し、タオルで丹念に拭いた。
その後は窓辺に飾ってあるサボテンの隣に置く。
そして、ユキは自分の体酷く冷えていることに気がつく。

冬季に入る前に、お天気お姉さんがにこやかに言っていた
――近年稀に見るほどの寒気が日本列島を襲っているという事実を思い出す。
歯をかちかち、といわせながら自身はもう一度風呂場へと戻った。

まったくもって生物というのは手がかかる。
ユキは手をわずらわされたにも関わらず、暖かな湯船につかりながら
ふと、笑みがこぼれた。
生物というのは至ってそういうものなのだ。

ユキが朝風呂から出た後の行動は何年も前から決まっている。
着替えを済まし、使い古したトレンチコートを着て、使い古した仕事鞄を持ち、
靴箱にしまってあるホッカイロを一つポケットへ入れ、
【いってらっしゃい】という人もなく、外へと出るのだ。

ただし今日は違った。
着替えを済まし、コートを着、鞄を持ち、ホッカイロを持った後、
ボトルペットが日向にあたっていることを確認して外に出た。
小さな違いで本人すら気付いていなかったが、
何かを気にかけることにユキは充実に近い満足感を得ていた。
冷えた指先をポケットのホッカイロで暖めながらユキは駅へと向かう。

朝食は仕事場で食べるか、
それとも朝マックにするか、……
ユキが朝食に思考をめぐらしていると、
帽子を深くかぶった男が
自分の目の前を歩いていることに気がついた。

驚いた、まったく存在感のないやつだ。
ユキは歩くペースを落とし、男との距離をとった。

しかし、ボトルペットが一般に流通してからというものの、挙動不審の人間が多くなったな。
まあ、根拠はないが……、

今、自分の目の前を歩く小柄な男もきょろきょろ周りを見回して
【外】ということに怯えているようだ。

そして【人】というものにも。

男のポケットからペットボトルのふたが見えた。
もしや、……平野はついその男のポケットを凝視する。
横断歩道で男が止まり、ユキも男のポケットから視線をはずした。
男がボトルペットを持ってたからといって何になるというんだ。
ユキは自分の好奇心にうんざりしながらも、
ボトルペットが孵化した後のことに思いを馳せる。
あと8日か9日で孵化するんだよな……、
あの説明書によるとやることは山積みだ。

挙動不審の男がポケットからペットボトルを取り出した。
ユキはつい身を乗り出すようにしてペットボトルを見たが、
中にはお茶が入っているだけだった。

男がお茶を飲んでいる間、
ユキは自分の頭を軽く叩いて笑うしかなかった。
まったく、俺は自分が思うほどボトルペットの成長を楽しみにしているらしい。
そして、ふと……それは突然にユキの頭の中に浮かんだ。
【ボトルペットが孵化した後はボトルペットだと悟られてはいけません】という昨日読んだ説明書の文面だ。

あれはどういう意味なんだろうか。
長い割りにあの説明書は肝心なことを書いていないんだよな。
そこに俺は製作者の性格の悪さを感じたんだが、俺の考えすぎか？

あの番組に出てきた科学者兼発明家を思い出し、
ユキは意地の悪さで、肝心なことをかいていない可能性は高いなあ。
という結論に達する。

信号が青にかわり、
ユキは他の数々の通行人に紛れながら横断歩道を渡っていく。

――その頃、ボトルペットを盗んだとして警察に保護されている男を迎えに行かなければならない女が居た。

「まったく、まったく、まったく、まったく、まったく！！」
加賀あい子は朝から警察の電話があったことで機嫌が悪かった。

息子であるヒロヤがボトルペットという何だか分からないものを盗んだから迎えに来い。という
偉そうな電話があい子は許せなかった。

確かに、私の息子が悪いけれど
私は親として愛も教育もぴったりしっかり注いできたのよ。
それを、まるで駄目親みたいに扱って……女手一人で育ててきたのに、あんまりじゃない。
子供なんて結局、気質なのよ。
こっちが何したって馬鹿は馬鹿だし、天才は天才なの。

そんな自論をベテラン教育者として名を馳せているあい子が脳内でわめいていると知ったら
問題児を持つ親達は天と地はひっくりかえるくらい驚くだろう。

あの馬鹿息子、あの馬鹿息子、ばかばかばかばかばかばか。
自分の息子を何度も罵倒しつつ、
横断歩道を渡り、駅に入り、電車にのって

ヒロヤが保護されている警察署に向かう……のが普通だがあい子はそうはしなかった。

横断歩道を渡ると、あい子は駅前のコーヒーショップに入った。

そして、「キャラメルスペシャルトルコーヒー」と、舌を噛みそうな注文をする。

「かしこまりました、スターフォックスのカードはお持ちですか？」店員が愛想よく笑うのにさえ、あい子は噛み付きたい衝動にかられる

「持ってないわ！？それが何か！？持ってないと駄目なの！？ビデオ屋みたいな感じでストロー返さないと延滞料金があるわけ！？え！？そうなの！？」

そして、衝動のままに行動する。

「い、いえ……お持ちでいらっしゃるとコーヒー一杯につきポイントがたまりまして」

店員があい子の衝動にあてられ、驚きのあまり目を見開きながら説明をした。

「あんたのコーヒーショップがくれるものなんてたかが知れてるわ！出来のいい子供は何ポイントよ！さっさとコーヒーつくって、私にちょうだい。

カードほしがる奴は自分で言ってくるようなせこい奴らなんだから、いちいちご紹介しないで！」

「も、もうしわけございません……」

店員はあい子に怯えた様子で謝り、

キャラメルスペシャルトルコーヒーを作るためにレジを一度離れた。

店員が大急ぎでキャラメルスペシャルトルコーヒーを作る様子を見て、
あい子はすがすがしい気分になる。
自分が命令した通りに人が動くというのは、何と気持ちが良いものだろう。

店員が「お待たせしました」と、怯え交じりの震える手であい子にコーヒーを手渡した。
「ありがとう」あい子はにこやかに店員からコーヒーを受け取る。
先ほどの衝動を間近に受けた店員はあまりの違いに目が点にならざる得ない。

あい子は窓際の席に座り、店員が大急ぎで入れたコーヒーを優雅に口にする。
そして、あい子がキャラメルスペシャルトルコーヒー飲み終わる頃にカフェに一人の男が入ってきた。
その男は【挙動不審】という名がふさわしく、目が隠れるほど深く帽子をかぶっていた。
男はコーヒーを注文することなく、まっすぐにあい子の席へと向かった。

男があい子の向かいに座ると、あい子は茶封筒を無言で男に手渡した。
そして、男は無言のまま茶封筒の中身を確認する。

――「金、確かに受け取った。保護者として息子さんを引き取りに行きますよ」
「ええ、お願い。それで、本当にマスコミにバレないように引き取ってくださるの？」
「まあ、警察の内部のことは任せてくださいよ。保護者のフリをし

て引き取る方法も知ってるもんでね」
男は自信満々に話した、あい子は少し口端をあげて男を若干見下すように言う。
「一応、私は教育者の最先端なのよ。貴方、まるで馬鹿にしてるみたいだけどね」

「最先端ねえ？」
男のせせら笑いにあい子が眉をひそめる。
「何百人の子供を救ってきたのよ、良い親であることと教育者であることは必ずしも一致しないの」

あい子はツン、とした態度で言い放つとキャラメルスペシャルトルコーヒーのカップをゴミ箱に捨て、
男とこれから一生の無関係を貫き通すかのように駅前のコーヒーショップを出て行った。

「さてと、さてと、さてと……」
男はポケットに入っていたペットボトルを取り出して、お茶を口に含み、
問題児を引き取るためにカフェを出た。

そして、男は駅の売店で最近発行部数が大幅に跳ね上がったという雑誌【タイラノ】を手にする。
タイラノの表紙は、安っぽい色の文字が羅列してあった。

街中で見ないボトルペット　何故！？
タイラノライターが語る　あの番組で起こったリアル話！
教育者加賀あい子　不良更正施設検討。
小説盗作！？ベストセラー作家の噂。

男は表紙の文字を読んで微笑んだ。
まさか、とは思うが……この四つの特集何の運命か何の因果か、
あの番組に出ていた著名人が全員揃ってるじゃないか。
男は加賀あい子が育てた不良を引き取るために人の波にのまれていった。

男が不良を引き取りに向かい、
加賀あい子が他人の不良を更正させ、
平野ユキがある男からとても皮肉な情報を仕入れたことで外をかけずりまわっている時、

ボトルペットの製作者である男は、警察官と名乗る男と電話をしている最中だった。
彼の部屋は科学者であり、発明家であるせいか一般人には到底名前が分からない代物が所狭しに並んでいた。

「たまごを飲んじゃった子がどうなるか、と言われてもね」
開発者の男は肩をすくめる。
そして、卵を飲んでしまった少年を心配している警察官に事実を告げる。

「そんなの分からんよ」
開発者の男は間髪を入れずに自己擁護の為に話を続ける。

「説明書にはちゃんと、食べても責任は持たないって書いてあるだろ？
こんにゃくゼリーにも老人とガキは食べるなって書いてあるよね、

君ね。
それで食べちゃって裁判にされてもこんにゃくゼリー側が勝ってるんだよ。
私だってこんにゃくゼリーは食べたい。
だけどね、もう歳だから我慢してるんだよ。
そういう他人の我慢を踏み散らかすようなことをした人間が勝つ権利はない。
これ当然だろ、君」

相手の警察官がうんざりしたようにため息をついたのが受話器越しに聞こえ
開発者であり科学者である男には怒りが湧き上がってくる
「だーかーらー、何度も言ってますがね」
警察官がまるで相手を馬鹿にするように話すせいで開発者である男の怒りは温度をあげていた。
沸騰するのも間近。

「裁判に勝つかどうかを私は聞きたいんじゃない。
彼はどうなってしまうんだろうと心配しているんですよ、ほら……ちゃんと出てくるんですか異物は」

「だーかーらー、分からんと言ってるだろう！
出てくるかもしれんし、出てこないかもしれない。
まあ、私の見解じゃあれかね。出てこないね。多分」

「出てこないんですか！？それって消化されるんですか、大丈夫なんですか？」
警察官の男が驚きながらも楽しんでいるのが受話器越しでも分かった。
ボトルペットというのは【未知の恐怖】と【未来への好奇心】を上

手く刺激するそういうものなのだ。
警察官の男の楽しそうな声に
開発者である男の怒りは氷水につけられたかのようにしぼんでいった。

この男、目にうつさずとも分かる。
この状況を大変楽しんでること、好奇心に踊らされてること。
そういうものを作れたという事実が開発者の男にとって何より嬉しかった。

「確かな証拠はないけどね。
飲み込んだ彼の体がペットボトルの役割をする可能性がある。
とりあえず、摘出手術が妥当だろう」

警察官の男が小さい声で「おそろしい」と言ったのが聞こえた。
「それで、摘出手術を勧めるのかい？」開発者の問いに、警察官は答えた。

「彼が卵を食べてしまったことは警備員の男しか見ていないんですよ」

警察官の男はその状況を楽しんでいるようだった。
そして、開発者の男は警察官の口調に違和感を感じる。
好奇心だけではない、悪意の含んだ何か。

「警備員の男はビルに挟まっていた私に上に報告しておいてくれ。
と伝えてきたんです。
私ってば、卵を飲み込んだという事実、上に伝えていないんですよ

ね。
皆はボトルペットが壊れてボールのような存在が消えうせたと思ってる。
不思議な代物ですからね、そう考えるのが妥当でしょう。
あの少年も、それを話す気はないようですし……」

「そして君も話す気はないんだね？」
開発者の言葉、数秒の沈黙が二人を包んだ。
そして警察官の男は自信を持った声で問いに応える。
「ええ、もちろん」

「実は私はアイツのせいでビルに挟まってしまいましてね。
救助隊は私を救助するためにビルの壁を少し削らなくちゃいけなくなった。
その削った分をビルの管理者が弁償するように要求してきました。
そして、なんと！　上司には税金で落ちないといわれてしまった。
私が金を払わなきゃいけない。
しかもそのマヌケさを同僚や、上司から笑われてね……
こんな歳でまだ平の警察官で年下の上司に笑われている。こんな羞恥には耐えられんのですよ

もう４５にもなって、あだ名がカツサンドなんてね」

電話越しに警察官が嗚咽をもらし、泣き出した。

「カツサンドの何が悪いんだね君。あんなに美味しいものこの世にないよ。
まったく、もう少しカツサンドに敬意を払ったらどうだ。
命をささげた豚がパンに挟まっているんだぞ。君は命をかけてビルにはさまったんだ。

まったく、被害者面もいい加減にしたまえ」
開発者は電話を放り投げるようにして切った。
そして、電話を切られた相手である警察官はビルの一件で上司から暫くの休暇を言い渡され、
万引き犯への憎悪が消えずに、自分に羞恥心を与えた相手に復讐を目論んでいた。

――

平野ユキが帰宅したのは、夜中の二時だった。
部屋には朝と変わりなく、サボテンの横にボトルペットがある。
白い卵が水の中でぷよぷよと浮いている様子にユキはつい、笑ってしまう。

俺はこんなにも疲れて帰ってきたのに呑気なものだなあ。
夕食を外で済ませてきたのは正解だった、
きっと家で食べたら眠さに負けてボトルペットに構えなかっただろう。
ユキは昼の空いた時間に買ってきた絵本を仕事鞄から取り出す。
【ヒトシ君ヒトリキリ】という、絵本にしては寂しすぎる題名だ。

ユキはボトルペットと絵本を持って布団に入った。
そして、一つあくびをした後に絵本を開く。
絵本にはどうやって描いているのか分からない程に、綺麗な夜空とヒトシ君らしき子供がかいてあった。
卵の為に買ってきた絵本だったが、子供以来という懐かしさにユキ自身もなかなか楽しめそうだ。

ユキは一言一言をまるで小学生時代を思い出すかのようにゆっくりと読む。
大人とは違い、一つ一つの文の意味を音読しながら理解するのが難しかったあの時代だ。
「ヒトシ君はヒトリキリでした
ヒトシ君の親は山にしばかりと洗濯に行くといったまま帰ってきません
ヒトシ君が住む町には山がないので、相当遠くに言ったのでしょうね」

次のページをめくる

「ヒトシ君の口グセはヒトリってヒトが言うほど悪いもんじゃねえなあ。でした。
好きなときにお菓子を食べれました。
誰かにわけあたえることもなく、好きな時間に好きなように。
そしてなにより、ヒトシ寝なさいよ。というヒトもいなかったので夜に散歩に行っても誰も怒りませんでした」

「その日の夜は星がきれいな夜でした
星がいくつもいくつもヒトシ君にふりそそぐようでした。
ヒトシ君はきれいさに機嫌がよくなりました
そしてヒトシ君は家にかえってビデオを見ます」

「ビデオを見ました。とても面白くて何度も笑いました。
ヒトシ君はなんどもなんどもそんな夜を繰り返しました。
夜に星を見ました、月を見ました。流星群を見ました。
夜に本を読みました、つまらなかったでした。おもしろかったでした。
夜に絵をかきました、上手くかけました、へたにかけました、たの

しかったでした。

そして気付きました。
ヒトシ君はいつか死ぬのです。
さて、いつか死ぬのにどうしてヒトシ君は
きれいを見なければいけないんですか。
楽しくなければいけないんですか、
上手く絵がかけたらうれしいんですか。

ヒトシくんはヒトリってものすごく楽しいのに、
そのかわりたのしいの意味がないことに気づいてしまいました
もうヒトシはヒトリではいれませんでした。
山に行かなきゃいけませんでした

ヒトシはありったけの食べ物と水を持って山に行くことにしました。
その道はこんなんでした。
不良にからまれました。
知らない男の人にさらわれたりもしました。
親がいないと分かると金にならないからどっかいけと言われました。
猫にかまれたりもしました。
ザリガニを食べてみたりもしました。
そしてヒトシはつかれて川の近くでやすむことにしました。
だいぶつかれていました。もう自分の体が重くて重くて歩けそうに
もありません。
そして、あることに気がつきました。
自分が持ってきた食べ物を食べていないことです。
だいぶ存在を忘れていたせいで、小さかったリンゴが大きいリンゴ
に成長していました。
ヒトシの身長より大きくなっていたわけです。

ヒトシは感激してリンゴを食べようとしましたがとても固くなって
いて食べれませんでした。
仕方ないのでほかのものを探してみました。
大きなみかんは皮をむくことができなくて食べれません。
大きなナシも固くて食べれません。
最後にのこったのはモモでした。
モモの皮はすこし固かったですがリンゴやナシよりマシでした。

ヒトシはおなかがすいていたのでわれをわすれて食べました
食べまくりました。
そしてヒトシが気付いた時にはモモの中に入ってヒトシは川に揺ら
れていました。
どんぶらこーどんぶらこーどんぶらこーそんな音をたててヒトシは
揺られていきます。

朝になると、目の前には母親と父親が居ました。
洗濯をしていたら流れてきたとのことでした。
でもヒトシは二人が居たときより成長していたので母親と父親はヒ
トシがヒトシだと気付きませんでした。

二人が「モモタロウ」と名づけようといいました。
ヒトシはもうヒトリではありません。ヒトシでもなくなってしまい
ました」

「とても酷い親でした」ユキは最後にそう付け加えた。
これを常識だと思って育ったらどうなるか想像絶したからだ。
絵に惹かれて買ったものだったが、
今度は中身も確認しようとユキは心に決めて部屋の電気を消した。

小説家の覗き見

――ユキが読んだ本の主人公、ヒトシ君は実在した。
もちろん、その絵本同様の人生を送ってきたわけではない。
いわゆる、モデルだ。
モデルとなったヒトシの母親は自分のことで大忙しでヒトシにかまわなかった。
父親はどこに行ったか行方知らず。
そのモデルとなったヒトシがユキの向かいの家の老夫婦の孫だとユキは知る由もない。

その頃、ヒトシのモデルになった彼は真っ暗な部屋で爪を噛んでいた。
指先からは血が滲み、ぽたぽたとズボンの上へと落ちる。
彼は今年１８歳になった。世間的に見てほとんど大人に分類される。

部屋のベッドには機関車トーマスの毛布と枕。
青い机と椅子はとても小さい。
床には１８ピースのパズル。
とても、１８歳の部屋には見えない。
まるで１０歳、否……８歳と言われても納得できる部屋だった。

その部屋を出て、短い廊下を歩くと薄明るい光がドアから漏れている。
ダイニングルームでは老夫婦がコーヒーカップにコンスープをそそぐところだった。

「ヒトシが戻ってきたのは嬉しいけど」
ヒトシの母親は椅子に座り、思い悩んだようにつぶやいた。
その母親は今朝、ユキが裸で走り回っているのを目撃したお節介なおばさんだった。

「けど？どんな状態であろうと帰ってきたんだ。喜んでやろうじゃないか。
明日にはケーキを買って、そうだなあ……ヒトシが好きなチキンも買いに行こう」
そしてこちらも、今朝そんなお節介おばさんをなだめていた夫である。
今朝の明るい雰囲気は欠片も見えない。

「そうねえ、せっかく帰ってきたんだもの。お祝いしなくちゃねえ」
「でも隣の井上さんには知られないようにしないといけないよ」
夫は妻に声を潜めて言う。

「あの井上さんは何でもかんでもうちのことを小説にしてかきたてるんだからあ、
もしヒトシが帰ってきたとなりゃ、あの井上……何を描くか分からん」
夫は怒りを飲み込むようにコーンスープをがぶ飲みした。
妻もつられてコーンスープをがぶ飲みする。

「うまい棒の穴は何故あいているかを読んだかい、お前」
夫が空になったカップを置き、飲み込みきれなかった怒りを吐き出すように言う。
「最初の一説で読むのをやめたよ、あたしはね。
うまい棒の穴はのぞきにはうってつけだ。とはじまったからにゃあもう読む気が失せたね。

あのヒトシ君ヒトリキリの絵本もどうだい。ヒトシを馬鹿にしてる」
母親は怒りで手のひらがかゆくなってきた。
そういう厄介な体質だった。

母親は手のかゆみを振り払うかのように、
電話の横にある一冊のノートに目を向ける。
そのノートは古びていて表紙には【小説ネタ帳　――ヒトシ】とかいてあった。
まだ拙い字だ。

「許せないよ……」母親が嘆いた。
そして夫は妻の発言に応えるように、「絶対に捕まえてやる」と意思を固くした。

老夫婦がうらむ相手であるベストセラー作家井上はそのとき次回作を練っていた。
次回作を練る机の上では冷めたコーヒーとデジカメ、そして高校の時の卒業アルバム。
……【小説盗作！？ベストセラー作家の噂】とかかれたタイラノという雑誌。

「汚名着せようたってそうはいかないてーの。
売れた作品は俺の完全オリジナルなんだからさあ、何が盗作だよ。
誰がチクったんだよ」

井上は誰に聞かれることもなく、椅子に座りくるくると回る。

「大体、あれは盗作じゃねえの。正当なる取引なんだって」

「あの記者、平野ユキだっけか。許せねえな。
しつこく俺をつけまわしやがって、証拠もねえのに盗作、盗作って」
井上は誰に聞かせるつもりもなく、酔う感覚を味わいながら椅子でくるくるとまわり。
感情を発散させていく。

「でも、あいつ……どっかで見たことがあるんだよな。どこだ？」
井上は自分の斜め向かいのマンションに平野が住んでいることをご存知なかった。
番組で共演していたこともすっかり、忘れていた。
井上という人間を言葉で表すとしたら、「適当」「欲に従順」「ずるがしこい」の三つだった。
適当で利益にもなりそうにない男を覚ることは井上にとって難しい。
冷めたコーヒーを飲んだ後、井上はまわりすぎて酔っていたせいでその場でコーヒーをふきだした
「何もする気がしなくなちゃった感じ」と言い、こぼれたコーヒーをいらだたしげにティッシュで拭いた。

そのとき、ふと井上の頭に降ってきた。
井上は次回作で悩んでいた。

隣の家は最近、凄く静かな住宅と化していて取材の価値ゼロ。
どうだろう、誰しも秘密はつきものだ。
そろそろ標的を変えても良いんじゃないだろうか、
井上は今日小説のインタビューという仮面をかぶって図々しく家にあがりこんできた記者を思い出す。
井上はゴミ箱を漁り、その記者の名刺を拾った。

面白そうな秘密がなければ、また標的を変えれば良いさ。
井上は自身の持ち株である適当を発動して、気楽に考えた。

井上は慣れた手つきで引き出しから手帳を取り出す。
携帯が復旧した今の時代にはめずらしい、電話帳だ。

しかし電話帳には一件の電話番号しかかいてなかった。
夜中の四時、迷惑も考えずに井上はその相手へと電話をかけた。
コール一回で出た、どうやら相手も暇しているらしい。

「もしもーし、貴方の井上です！」
井上が親しそうに声をかけた。

『おいおい、まだ日も出てないぞ。何のようだ？』
だが、友人というわけでもないらしい。相手は切迫した雰囲気を持っていた。

「そりゃあ、頼みたいことっていうのは個人情報の開示しかありませんよ。警察官さん」
井上は相手の職業を言った。
『俺は今、休暇中でな。ビルにはさまってカツサンドになったんだよ』

井上は警察官の言葉にはっはっは、と笑う。
「わけ分からないこと言わないで下さいよ。今回も頼みますって。金は弾ませますよ？いつまでたっても平の警察官さん」

井上の挑発に警察官は気を悪くしたようで応えない。
「平野ユキっていう記者の住所をお願いします。あと何か秘密を抱

えて居そうだったら金額は倍。どうですか？」
唸るような声が井上の携帯越しに聞こえてくる。
「ありがとうございます！」
井上はそれを【承諾】と受け取った。
「いや、本当に貴方なしに俺はありませんよ。
高校の時から感謝しまくりです、俺は貴方のおかげでちゃんと悪に堕ちれたんですから」
井上の瞳が翳った。
それは井上の過去に起因する。

――高校生時代の井上は、とても真面目な人間だった。
だがしかし、努力をしても報われない人間だった。
多分一番勉強した、多分誰よりも真面目だった、多分誰よりも遊ばなかった。

「あのゲーセン潰れるんだってよー。
今、ユーフォーキャッチャーめちゃくちゃとりやすい」
「でも人形とったところでお前どうすんの？部屋に飾るの？らしくねえよ」
そんな会話をしている人たちを馬鹿にすることはなかった。
井上はとても良い人間だった。
井上は真面目だった。
誰よりも遊ばなかった、全ての時間を犠牲にしてきた。

青春を、若い時代を、何もかも勉強に捧げてきたのに、安定した人生を得るために自分が努力家だと信じて。

でも、意図も簡単にゲーセン潰れるんだってよー。と話していた……名前を覚えていない。

むしろ、脳内から【消去】した。男は全てをかっさらっていった。

どんなテストでも井上の上に入った。

「井上ー、凄いなお前。いつも勉強してんじゃん」

その男、呑気に休み時間にも勉強している俺に言った。

上目線を感じる物言いではなかった。

「俺全然駄目。勉強とか面倒でさ」

周りが「お前は天才なの！」とはやし立てた。

私の努力が費やした時間が消えゆく青春が二文字にかき消された。

人生の理不尽に井上は耐えられなかった。

天才と呼ばれた男のの胸ぐらを掴んで、井上は殴った。

「ふざけんな、ふざけんな、悪いかよ、悪いかよ。努力してんだよ、頑張ってんだよ」

井上は声を荒げた。

もしかしたらこのクラスではじめて井上の声を聞いたという人間が居ても不思議はない。

「頑張ってる人間に言ってんじゃねえよ、面倒とか言うんじゃねえよ」

井上は涙が止まらなかった。

どうして上に立たれなくちゃいけないのか分からなかった。

上に立っても良い、上に立った自覚を持てよ。と泣き叫びたかった。

「てめえ何してんだよ！」
井上のとりまきが私を押さえ込んだ。
私が殴られた。
最後にいつも俺の上へ行く男が、私に殴られた男が「もういいって、やめろよ！」と止めるまで。
そして周りの人間が言った。

「ひがんでんじゃねえよ」

……僻むのは悪いことか？

だって、あんまりじゃないか。まるで日本の漫画やドラマのようだ。
散々努力して一位を保ってきた男が
主人公の才能だか、天才だかの二文字で越えて。
才能があることを自覚せずにのうのうと人気者になり。

【僻み】を悪として捕らえ、散々努力してきた人間に助けの言葉もかけず
まるで、なんで意地悪するの？　どうして殴ったの？といった天然顔で見る。
最後は僻んで悪とみなされた相手を許すことで【善】を気取る。

なあ、どっちが善だ。
僻むだろう当たり前だろう。どっちが悪だ。
才能を自覚していない人間が悪じゃないのか。
時間を費やした人間の心理を理解しようとする時間さえ天才には勿

体無いか。

なあ、どっちが悪だよ。

善悪に疑問を持っても、それでも井上は努力を続けた。
人を僻むような最低な野朗。と周りに思われても、
たとえ自分の努力が報われなくても努力家であると自己暗示をかけつづけていた。
それでも井上は勝てなかった。

――しかし、報われない自分に人生の転機は訪れる。

その日はめずらしく雪が降っていて、地面は雪により真っ白くコーティングされていた。
井上は歩くたびにしゃくしゃくというアイスをけずるような音を楽しみながら帰宅していた。
彼は１８歳のわりに子供らしい感覚を持っていたといっても良い。

学校から家までの道には川が通っていて、
その水の音を聞いて帰るのは井上にとってストレス発散にもなっていた。
学校の連中は放課後に残り馬鹿騒ぎをしているお陰で人通りも少なく、
川は何人も子供が溺れていることで【危ない】といわれ近づかなくなっていた。

一人だった。

過剰に期待する親も居ない、井上を【僻みの悪】と認識する人も居

ない、
自分は努力家だ、努力家だ、努力家だ。と自己暗示をかけるための鏡もない。

しかし、違った。一人ではなかった。
井上が一人ではなかったことに気がつくのに遅れたのには二つ理由がある。

一つは居た人物が人に見えないよう隠れるようにして行動していたからである。
二つ目は……特にない。

川の近くにはその頃、まだ木や草が生えていた。
今では流水の邪魔になるとして伐採されてしまったが、人が一人隠れるには充分だった。
一部で川の音が変化し、雑音が混ざっていることに井上は気付いた。

樹木の中に隠れるようにして座っていたのは、あの男だった。
努力もせずに、才能のみで井上の上に立っているあの男だ

しかし、すぐに井上は異常事態に気付いた。
あの男はいつも笑っていた、快活に。
今自分の目にうつる男の形相はすさまじく、そして川の音が変化している理由が分かった。
此処に居るのは一人でもなければ、二人でもなかった。

あの男が川面に誰かを押し付けていた。
井上はその場に立ち竦んだ。

人を殺していた。
殺されている相手は自分と同じくらいの年齢だろうか。
もう手に力はなく、抵抗をしている様子はなかったが男は顔を川に押し付けたまま動かなかった。

井上は男を見つめていた。
普通の人間ならば逃げるこの現状を直視出来たのは、
井上が【あの男に勉強以外で負けたくない】という負けん気によってである。
井上は呼吸を浅くして、男の形相を冷静に見つめた。
男が井上に気付いたのは、男が死んだ相手の服に石をつめこんで川にしずめた後のことだった。

男は井上が見ていたことに驚いた様子はなかった。
それよりぞっとしたのは、男が井上に見られたことに気付いて笑ったことであった。
そのとき、はじめて井上の【負けん気】は崩壊する。

この男は人間じゃなかったのか！
それが散々負けてきた、井上が出した結論だった。

「よお」
男が快活に声をかけてきた。
井上はつい身構えて一歩ひいてしまったが、もう自分を恥じることはなくなっていた。

「見られちゃったなあ」
男は脅すような雰囲気を見せなかった。

まったく、無問題だよ。と井上に語りかけているようでもあった。
「まあ、いつかは見られると思ったんだ。といっても、久しぶりなんだぜ？」
一人目ではないらしい、どうやら何人も此処で殺しているようだ。
「最近は伐採が進んでるからな、隠れるのは無理かもと思ったんだ」
そして、井上は気がつく。
確かにこの川は流れが荒く、正直怖い。そんな川に遊んでいる人間を僕は見たことがあっただろうかと。
ならばどうして、溺れる人間が居るんだということ。
そして合点がいった。
「今までここで溺れてきた人間は、君が？」
井上がはじめて男に話しかけた。
「そうだよ？」
男は平然と臆することなく応えた。
その後、男は井上に……
しかし、回想はここでどぎれることになった。
井上が椅子に座って当時に思いを馳せていた時、
携帯電話が早朝五時という時間も気にせずに鳴り響いたからである。
相手は先ほどの警察官様だ。
「はーい、もしもーし」
井上が少し間延びした声で出た。

『勘弁しろよ。これで最後にしてくれ』
井上と対照的に警察官には緊張感が漂っていた。

『まったく、最近は散々だよ』
警察官の最近のご感想について井上はコメントする気はない。

『平野ユキっていう記者だがな、
友人に頼んで調べてもらったがそんな人間は存在しない。　以上』
警察官の回答に井上は「それはない」と短く、学生時代の厳しさを思わせる怒気を含ませて言った。

「あいつ本当にしつこくてムカつくんだよ。
ああ、もしかしたらペンネームかもしれないな。もう一回調べてくれないか？そうじゃないとお金は払わないよ？」
警察官は自分のリズムを崩さずに続けた。
『タイラノっていう雑誌は存在したが、会社や編集などといったものが一切存在していない。
だから会社として機能も果していないのに、雑誌として存在はしてるんだよ』

「どういう意味かな？」
井上も調子を取り戻し、軽薄さを身に着ける。

『それで会社の形態を調べたんだが、経営は松坂という人間が一人で背負っている。
その松坂という人間なんだが、お前も知ってるだろ？
ボトルペットを発明した自信過剰そうなあの、発明家だよ。
あとは寄せ集めのダークで嘘八割そうなネタを色んな人間から寄せ

集めて発行してる。
ただし、ライター達がどこでそういう情報を仕入れてるかは分からないが、
あの手の週刊雑誌にしては凄いことに、殆ど嘘がない。
麻薬や殺人の事件において警察よりくわしく知っていることがあるから
タイラノという雑誌は元々上層部には目をつけられていたらしい。』
井上は話を聞いていて、心が躍るのを感じた。
今回の題材を思いついたのである。

「次回作はタイラノライターで行くしかないな」

『だけどライター達の連絡はほとんど電子機器……パソコンや携帯のことだが、
それを使っているから個人情報を特定するのは令状でもない限り難しいぞ』

「そりゃあ一般人だったらな。平野ユキは俺に張り付いてるんだ。俺も張り付けば良いだけの話だよ。この件は警察より俺の方が有利かな」

警察官がじゃあ、金は……と言い終わる前に井上は電話を切っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1134z/

ボトルペット

2011年12月13日07時47分発行